

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## 終章 根栽農耕文化圏の提唱：議論とまとめ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 紀夫 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00008943">https://doi.org/10.15021/00008943</a>

## 終章 根栽農耕文化圏の提唱

—議論とまとめ—



ジャガイモの収穫風景（ペルー・クスコ県マルカパタ村）

## 1 はじめに

議論をおこなう前に、これまで述べてきたことを簡単にまとめておこう。第1章では、アンデスの中で中央アンデスは最も高地まで多数の人びとが暮らしている地域であること、そして、その背景にはそこが低緯度地帯に位置していることを指摘した。第2章では、中央アンデスが世界でも稀なほど多種多様な作物のセンターであり、なかでもイモ類の種類が豊富なことを指摘した。第3章では、高地部での動植物のドメスティケーションを扱い、ジャガイモの栽培化とラクダ科動物の家畜化のあいだに密接な関係のあることを指摘した。第4章では、農耕の発達とともにアンデス各地で諸文化も発達したことを述べた。第5章では、インカ時代にジャガイモなどのイモ類栽培とトウモロコシ栽培の2つの農耕が併存し、後者は儀礼的・宗教的色彩が濃く、前者は日常的な食糧源であった可能性を示唆した。第6章ではマルカパタの農耕文化について詳しく報告し、その特徴についても検討を加えた。先住民だけに限定していえば、その暮らしの大きな特徴は高地を中心としながら、生業に関しては高地にかぎられず、大きな高度差を利用していることであった。また、食生活から見れば、従来いわれてきたようなトウモロコシ中心ではなく、ジャガイモなどのイモ類を中心としたものであった。また、第7章では、中央アンデス高地において農具として踏み鋤が卓越しており、それはジャガイモ栽培に不可欠といえるほど重要な役割を果たしていることを指摘した。さらに、第8章では、中央アンデス高地は世界的にも稀なほど、イモ類の加工技術が発達した地域であり、それは貯蔵しにくいイモ類を貯蔵可能にした点で特筆すべき技術の開発であることを指摘した。

そこで、以下では、これらの結果も視野に入れながら、中央アンデスの、とくに高地部を中心として農耕文化の特色を明らかにしたい。

## 2 「インカ最後の村」

マルカパタの中心にプエプロとかヤクタと呼ばれる集落がある。その集落については先述したが、ここには雑貨屋が数軒ある。パンやマッチ、塩、砂糖、灯油なども売っており、これらを買いに先住民も時々山をくだってやってくる。その先住民のなかにマルカパタではふだん見かけない姿を目にすることがある。女性の姿はなく、男だけである。みんな脛がみえるほど短いズボンをはき、ウンクと呼ばれる短いポンチョを着ている。スペイン語は話さず、ケチュア語しか通じない人たちである。

彼らはマルカパタの隣にあるハプヤキクの村びとたちである。隣村とはいっても、山をひとつ越え、徒歩で1日くらいの距離にある。そこには店が1軒もないので、わざわざ山を越えてマルカパタのプエプロまで物を買いにやってくるのである。マルカパタの

村びとによると、ハブにもキクにもミスティは住んでおらず、すべて先住民だけの集落である。そして、ハブやキクに隣接するケロは「インカ最後の村 (el último ayllu Inka)」[Flores Ochoa y Nuñez del Prado 1983; Flores Ochoa y Fries 1989] といわれるほどインカ以来の伝統がきわめて色濃く残されている地域として知られている。そのため、1950年代から何人もの研究者が入って調査をしてきた。そして、人類学者のヌニェス・デル・プラドとウェブスターが調査報告を出しているが、彼らの調査結果は様々な点でマルカパタにおける私の調査結果と共通しており、きわめて興味深いものである [Nuñez del Prado 1983 (1968); Webster 1971]。それらの報告に基づいて、ケロの農耕や牧畜について見てみよう。

ケロはビルカノタ山脈の東斜面に位置する。ケロの谷も、マルカパタと同じように、全体として半開きの扇のような形をしている。そして、4つの谷が合流して扇のかなめの形をなし、険しい渓谷となって東のアマゾン低地側にくだる。東西の距離は約60km、生活圏の標高は雪山に近い標高約4800mからアマゾン源流域の1400mにわたる。

ケロの4つの谷の上流の標高4000m以上の高原に11の集落があり、約350人が居住している (写真終-1, 図終-1)。これらの集落は、比較的なだらかな源頭部の谷と谷をむすぶ小道によって互いに往来が容易であり、全体としてひとつの共同体を構成している。この高原に各世帯は主居住地をもつが、マルカパタの例で紹介したように、彼らも高地だけではなく、低地部も利用している。

4つの谷の合流点近く (標高3400m) には、ハトゥン (大)・ケロと呼ばれる中心の村がある。そこには、42戸の石積みの住居と小さなカトリック教会、それに近年になって建てられた学校がある。

ただし、このハトゥン・ケロは、通常は人が住んでいない空き家の村である。この村は、祭りや儀礼、集会、そしてジャガイモの収穫などの時だけに使われるのである。さらに、ハトゥン・ケロから約25km (高原からは約40km) くだった亜熱帯低地にも40から50の小屋がある。これらはトウモロコシの収穫などの時にのみ使われる。ここは、プシケロと呼ばれている。

さて、ケロの人びとは次の3つに大きくわけられる自然環境を利用している。

ブナ (標高4600mから標高4000m)

リヤマ, アルパカ, ヒツジなどの放牧と, ジャガイモ (ルキ) 栽培

ケチュア (標高3800mから標高3200m)

ジャガイモ, オユコ, オカ, マシユアなどの栽培, ヒツジの放牧

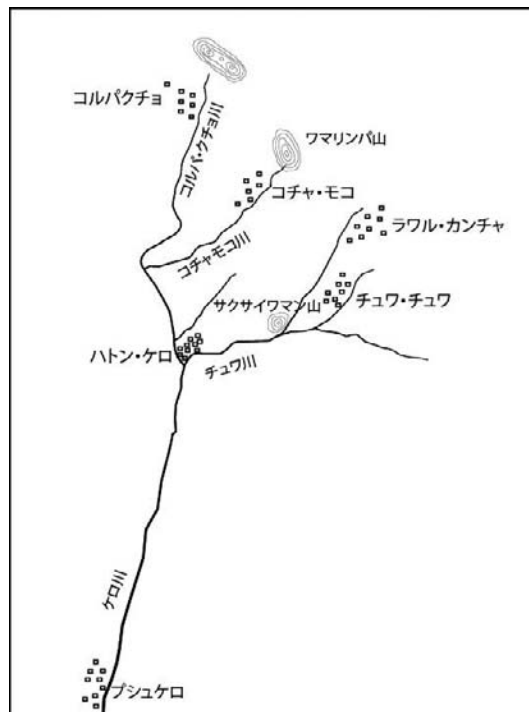
ユンガ (標高2000mから標高1400m)

トウモロコシ, トウガラシ, サツマイモ, カボチャなどの栽培

ブナでは主としてリヤマとアルパカが放牧されている。ケロ全体の家畜の数は、1955年の調査の報告では、アルパカが855頭、リヤマが916頭、ヒツジが1442頭であった。そ



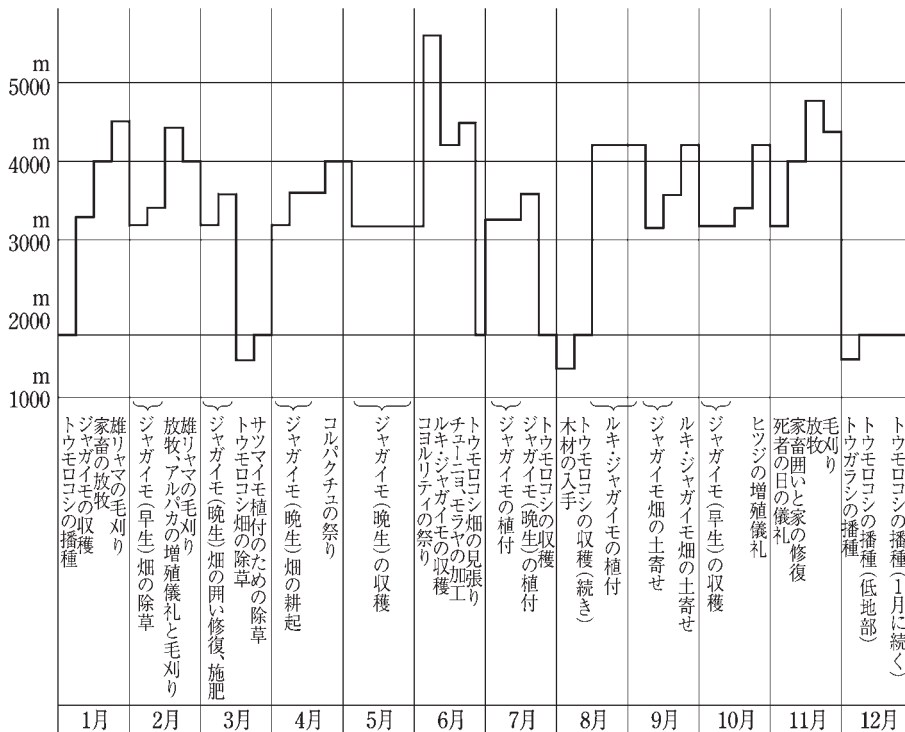
写真終-1 ケロのプナの集落 (稲村哲也放送大学教授提供)



図終-1 ケロ周辺の集落 [Flores Ochoa y Fries 1989] より

の後のウェブスターの報告によれば、家畜頭数はかなり増えており、1家族あたりの平均所有家畜頭数は約50頭である。高原の標高約4200mまでは、ルキと呼ばれる寒冷高地に適したジャガイモ(12品種)も栽培されている。

ケロの農耕ゾーンでは、ジャガイモが最も重要な作物であり、そこには15品種のチュ



図終-2 ケロにおける生業と標高 [Nuñez del Prado 1983] より

一ニヨ用のジャガイモと53品種の煮ただけで食用になるふつうのジャガイモが栽培されている。さらに、ここでは8品種のオユコ、8品種のオカ、3品種のマシユアなどのイモ類も栽培されている。なお、ヒツジや少数のウマ、ウシなども飼育されている。

ハトウン・ケロとプシュケロの中間地帯は非常に険しい渓谷になっていて耕地はほとんどない。プシュケロでは、トウモロコシを中心とし、それ以外の熱帯産の作物も栽培されている。プシュケロの木造の家屋は農作業に必要な時にだけ使用するものであり、そこには簡単な生活道具しかない。したがって、これらの家屋は出作り小屋と考えられる。

図終-2は、ヌニェスが作成したケロの住民の季節的移動の例である。このようにケロの人びとはきわめて頻繁に上下の移動をくりかえしている。ただし、ここで注意しなければならない点がある。それはマルカパタの例でも指摘したように、図終-2は家族のうちの誰かが移動したことを示すものであり、家族の一部は家畜の世話のために1年中高原にある主居住地で暮らしているのである。アルパカは高地適応性の強い家畜であり、1年中高原で放牧・飼育しなければならないからである。

### 3 中央アンデスにおける環境利用の方法

このような大きな高度差を利用した暮らしはインカ時代にも見られた。それが先述したチュパイチュ族やルパカ王国の環境利用の方法であった。このことから、アンデス高地の伝統的生活様式は、自然資源の高低差をできるだけ広く利用する方向で作りに上げられてきたことがうかがえる。それこそは、ムラによって「生態学的ゾーンの差異を最大限に利用する垂直統御」と呼ばれ、ウエプスターによって「多様な生態学的ゾーンの複合開発」と呼ばれるものであった。

しかし、このような「垂直統御」や「複合開発」による暮らしが現在も見られるのは、中央アンデスのなかでも主として東斜面である。ここは、アンデスの伝統的な文化がよく残っていることにくわえて、比較的せまい範囲のなかに様々な環境が見られるため、これらを複合的に利用することが可能なのであろう。マルカパタやケロがその例である。ペルーだけでなく、ボリビア・アンデスの東斜面でも同様の環境利用の方法が見られる[IFEA 1980; Mankhe 1984; 木村 1985]。

一方、ティティカカ湖畔のような高原台地では、大きな高度差を利用した暮らしは見られない。この高原台地は幅が広く、トウモロコシが栽培できるような低地が近くにならないため、その暮らしは高地部にかぎられるのである。たしかに、インカ時代にはルパカ王国のように中心はティティカカ湖畔の高原地帯にありながら、海岸地帯やアマゾン源流域の低地部まで利用している民族集団があった。しかし、この場合の大きな高度差利用は政治権力による社会的・政治的統合と強い関係をもっていたからこそ可能になったと考えられる。

このティティカカ湖畔を含む中央アンデス南部高地で、人類学者のウエプスターは牧畜を中心とした生業経済の特色を明らかにしている。それによれば、そこでは牧畜は、プナ（ティティカカ湖畔の高原地帯）でおこなわれるか、セハ（アンデスの東斜面）でおこなわれるか、という生態学的な要因に決定されるようだとし、次のように述べている。

「セハでは、そのコミュニティ（集落）は比較的せまい範囲のなかで、いくつもの自然区分帯が利用できるため、牧畜と農業の両方が可能である。しかし、プナに居住するコミュニティは農耕ができるゾーンにほとんどアプローチができないか、（中略）あるいは限られたゾーンにしかアプローチできないため、村民は牧畜専業か交換に専業化せざるをえない」。  
[Webster 1973: 129]

すなわち、中央アンデス南部高地では、セハ型とプナ型とでも呼べそうな2つの環境利用の方法が見られるのである。ただし、ウエプスターによれば、プナ型でも実際には牧畜だけを専業にするものは少なく、トウモロコシ栽培はしていないものの、ふつうプ

ナでも育つジャガイモ栽培はしていると述べている。

ここで興味深いことがある。それは、トウモロコシ耕地をもたないプナの住民も様々な手段を通じてトウモロコシを入手していることである。たとえば、ウエプスターは、プナ型の例としてプーノ県のパラティアのような牧畜専門の村やクスコ県のアルカヴィトリアのような牧畜とジャガイモ栽培をおこなっている村をあげているが、これらの村の村びともトウモロコシを手に入れている。さらに、最近の民族学的研究は、プナ型農牧民が高地で生産できる肉や干し肉、ジャガイモ、チューニョなどとトウモロコシを交換する例が多いことを報告している [増田 1980; 稲村 1995]。

じつは、マルカパタでもトウモロコシの収穫期になると、トウモロコシを求めてクスコ県だけでなく、プーノ県の高地部の村からも2日も3日もかけて物々交換にやってくる人たちが少なくない。さらに、彼らのなかには連れてきたリヤマなどを使ってトウモロコシの輸送を手伝い、10頭分運ぶと1頭分のトウモロコシがもらえるという慣行もある。

それでは、このようにしてまで入手につとめているトウモロコシは、不足する食糧を補うためなのであろうか。それとも、マルカパタの例で述べたように、トウモロコシは単なる食糧源ではなく、儀礼や宗教との強い結びつきがあるからなのであろうか。これを明らかにするためには、アンデス高地の人たちが主として何を食べているか、それを知る必要がある。

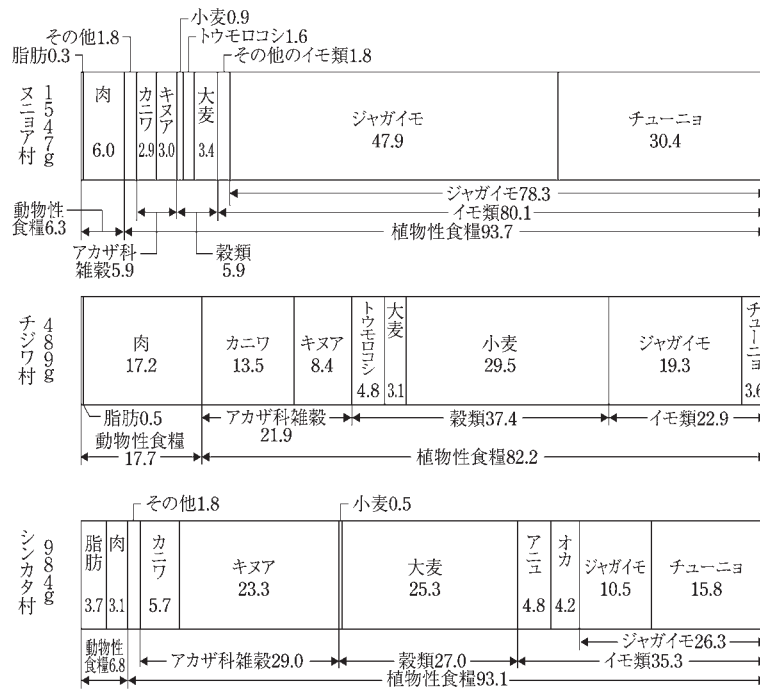
## 4 何が主食か

先に「イモづくし」といえるほどイモ類に依存したマルカパタの食生活を紹介したが、それを量的に示すことは残念ながらできなかった。じつのところ、これまで先住民社会の食生活について調査したものはきわめて少なく、信頼できる報告もかぎられている。しかし、ペルー南部のプーノ県にあるヌニョア地方では高地に住むケチュア族についての総合的な調査がおこなわれ、その一部として食生活についても詳しい報告がなされている [Gursky 1969; Picón-Reátegui 1976]。そこで、この報告を利用してアンデス高地に住む人たちの食生活を追ってみよう。

ヌニョア地方は、標高4000m前後のプナ帯に位置しており、そこでの主な生産活動は牧畜による家畜飼育とジャガイモやキヌアなどの高地に適した作物の栽培である。このヌニョア地方の3つの集落、すなわち、ヌニョア、シンカタ、そしてチジワで食生活についての調査が実施された。このうち、ヌニョアはヌニョア地方の行政の中心地であり、シンカタは標高約4000mに位置する伝統的な農村、そしてチジワは標高約4300mで牧畜を専業にする集落である。

さて、これら3つの集落での食事に占める材料を示したものが図終-3である。注目されるのはヌニョアの人びとの食事におけるイモ類の占める大きさであろう。ジャガイモ





図終-3 ヌニョア地方 (プーノ県) における食糧消費 (%) [Picón-Reátegui 1976] より

だけで全食事の半分近くになる47.9パーセントを占め、ジャガイモを凍結乾燥したチューニョやその他のイモ類もくわえると、じつに80パーセントも占めるのである。それに対してトウモロコシは全体のわずかに1.6パーセント、コムギやオオムギをくわえた穀類で見ても6パーセントにしかならない。むしろ、キヌアやカニワなどの雑穀の方が多い(9.9パーセント)くらいである。これは、カロリー量で見ても、その割合はほとんどかわらない。すなわち、全カロリーのうち、チューニョが49.5パーセント、ジャガイモが23.5パーセント、イモ類全体で74.2パーセントを占めているのである。

次にシンカタの例を見てみよう。食事のなかでジャガイモが占める割合は10パーセント程度であるが、チューニョやオカ、マシユアなどを含むイモ類で見ると全体の3分の1を占める。それに対し、この図で見るとかぎりトウモロコシはまったく食事に供されていない。ただし、このシンカタではキヌアやカニワなどの雑穀が全体の約30パーセント、オオムギが約25パーセントを占め、食事の半分以上をこれらの穀類が占めている。しかし、オオムギは旧大陸から導入された作物であること、ジャガイモと同じように寒冷高地に適した作物であることなどから、ジャガイモがオオムギにおきかえられたことが考えられる。したがって、オオムギの導入以前は、このシンカタ村でもっとジャガイモが栽培されていた可能性がある。

もうひとつ、牧畜専業の集落であるチジワの食糧源も見てみよう。牧畜を専業にしているだけあって、肉の消費量が他の集落よりずっと多く17.2パーセントも占めている。しかし、全体の食糧源のうちの80パーセント以上は農産物であり、この点でもアンデスの牧畜は農業と密接な関係をもっていることがうかがえる。そして、このチジワでもトウモロコシの消費量は少なく5パーセント足らずであるのに対し、ジャガイモおよびチューニヨは全体の20パーセントを超えている。

こうして見るとヌニョア地方でも食事に占めるトウモロコシの割合はきわめて低く、ジャガイモなどのイモ類の方がはるかに大きな割合を占めていることがわかる。しかし、イモ類は炭水化物は豊富だが、タンパク源に乏しい。それでは、彼らはタンパク源を何から得ているのであろうか。この点で注目したいのがキヌアやカニワなどの雑穀である。キヌアもカニワも、ともに寒冷な高地に適した作物であり、また栄養価の非常に高い作物としても知られている [Sauer 1946b: 496; Leon 1964b: 67]。とくに、タンパク含量が、トウモロコシなどと比べても、きわめて高いため、炭水化物以外の栄養分をあまり含まないイモ類中心の食事のなかでは重要な役割を果たしていると考えられるのである。

それでは、食事のほとんどをジャガイモおよびチューニヨが占め、キヌアもカニワもわずかしか食べていないヌニョアでは何からタンパク質を補っているのであろうか。このヌニョアの食事の栄養分析の結果からは、摂取されているタンパク質のうち、21.9パーセントが動物の肉、10.9パーセントが穀類（トウモロコシ、コムギ、オオムギなど）、17.0パーセントがキヌアやカニワなどの雑穀、そして、じつに49.7パーセントがイモ類から得ているとされる。つまり、摂取されているタンパク質のほぼ半分は、意外にも炭水化物以外はほとんど栄養価がないとされるイモ類から得ているのである。

これはチューニヨの貢献が大きいかもしれない。たしかに、イモ類そのものは炭水化物以外の栄養分の含有率は低いが、これは単位重量あたりの率であって、水分をほとんど取り去ったチューニヨのかたちになると、先述したように、そのタンパク含有率は100g中8.4gとかなり高くなり、ほぼトウモロコシのそれに匹敵するのである [Ravines 1978]。

こうして見てくると、ヌニョア村の場合も、シンカタ村の場合も、そしてチジワ村でも食糧基盤となっているものはほとんど高地産のものにかぎられ、トウモロコシはほとんど食事に供されていないことがわかる。これは、いずれの村もトウモロコシ栽培をしていないので、当然のことといえるかもしれない。しかし、先に述べたようにアンデス高地に位置する村であっても様々な方法でトウモロコシを手に入れている。おそらく、これらの村でも何らかの方法を通じてトウモロコシを得ているであろう。

実際に、マルカパタにはヌニョア地方から村びとがトウモロコシを手に入れるために収穫期にやって来るのを私自身も確認している。それにもかかわらず、食事のなかにトウモロコシがほとんどあらわれないのは次のような理由が考えられる。すなわち、交換

などの手段を通じてトウモロコシが得られたとしても、その量は決して大きなものではないのではないか。また、手に入れたトウモロコシは食糧としてではなく、ほとんど酒の材料として消費しているのではないか。

それでは、トウモロコシもジャガイモも栽培している村では食事の内容はどのようになっているのであろうか。その例としてマルカパタ村の食事を紹介したが、そこでもやはりジャガイモを中心とするイモ類が主食になっていた。そして、このマルカパタ村に似た例をもうひとつ付け加えることができる。それが先述したケロ村である。そこで長期にわたって人類学的な調査をおこなったウェブスターによれば、ケロ村での食事に占めるイモ類の割合は80パーセントに達するとされ、トウモロコシは食糧としてより、もっぱら酒の材料や儀礼、宗教的な行事に利用されているのである [Webster 1971]。

もうひとつ、トウモロコシもジャガイモも主作物として栽培している地域でのこれらの利用の方法を紹介しておこう。それは、短期間ではあるが、私も滞在したアヤクーチヨ県のカライバンバでの例である。ここでは、藤井龍彦および友枝啓泰による調査がおこなわれ、その報告も出ているので [藤井・友枝 1985]、それによって同地の農業および牧畜の概要を紹介しておこう。

カライバンバは、アブリマック県のバンパマルカ教区の最北端に位置し、同名の川の兩岸およびその上流部のプナを村の範囲とする。村で一番低いシチ（標高3050m）から、ピステ山の頂上（標高5160m）のあいだにわたる高度域を利用して、農耕を主とした生業に従事している。標高3310mに位置するカライバンバの集落は階段耕地の中央に位置する。その階段耕地はおおよそ標高3100~3500mの範囲に広がり、第1章の写真1-12に示したようにインカ時代に築かれたものらしく、美しい等高線を描いている。ただし、マルカパタとは異なり、階段耕地は、すべて村の住民の私有地である。そこでは、「灌漑・犁耕・トウモロコシ」という農耕技術複合が見られる。一方、階段耕地の上限（標高3500m）から耕地限界（標高4000m）までは村の共同耕地であり、そこでは「無灌漑（天水）・踏み鋤・ジャガイモ」という別の農業技術複合が見られる。

さて、カライバンバの主食はジャガイモであり、収穫したトウモロコシの大部分、おそらく70パーセントはチチャ酒に加工される。カライバンバでは、「石を1つ持ち上げるにもチチャを要求される」といわれるほど大量のチチャが日常的に消費されている。つまり、このカライバンバでも、先に見たように主食はジャガイモ、トウモロコシは主としてチチャ酒として利用されるという図式があてはまるのである。

このようなトウモロコシとジャガイモの用途の違いは、第6章で指摘したようにインカ時代にもあった。むしろ、インカ時代の方がその違いはもっと明確であったようだ。したがって、インカ帝国滅亡から500年近くたった今日でもその伝統は生きつづけていると考えられる。ただし、インカ時代のトウモロコシは宗教的あるいは儀礼的に重要な価値を付与された作物であり、それがチチャ酒としての利用に象徴されていた、と私は述

べたが、この点に関して変化はないのであろうか。

たしかに、カライバンバではチチャ酒は日常的に飲まれており、ハレ的な色彩は薄いようである。しかし、カライバンバではトウモロコシ耕地が共同体のものではなく、個人の私有地になったり、そこで使われる農具も伝統的なものではなく、畜力を使った犁であることに見られるように、かなりの変容が見られる。そのような影響がチチャ酒の利用にもおよんでいるのであろう。

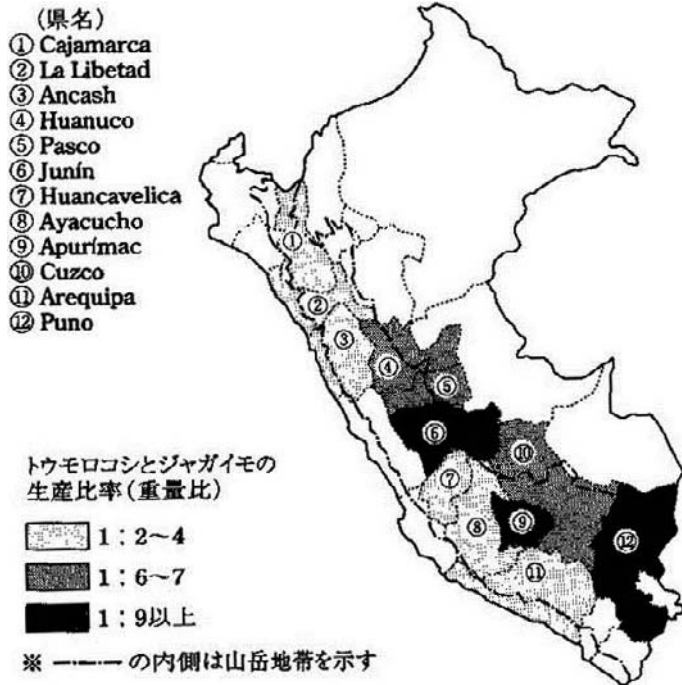
一方、アンデスでも最も伝統的な色彩が濃いとされるケロでは、トウモロコシは依然としてチチャ酒としてだけでなく、儀礼や宗教的な行事に欠かせないものとなっている。じつは、この傾向は私が長く滞在したマルカパタでも見られる。トウモロコシは、先述したように日常食としても利用され、食糧としての使い方ではジャガイモとの違いは認められないが、トウモロコシから造られるチチャ酒は儀礼や祭りに欠かせず、社会的にも重要な役割を果たしている祭りもある。それを象徴する祭りが、何度か言及したプエブロにある教会の屋根を葺き替える祭り、イグレスシア・ワシチャイである。

## 5 ジャガイモ栽培が卓越する地域

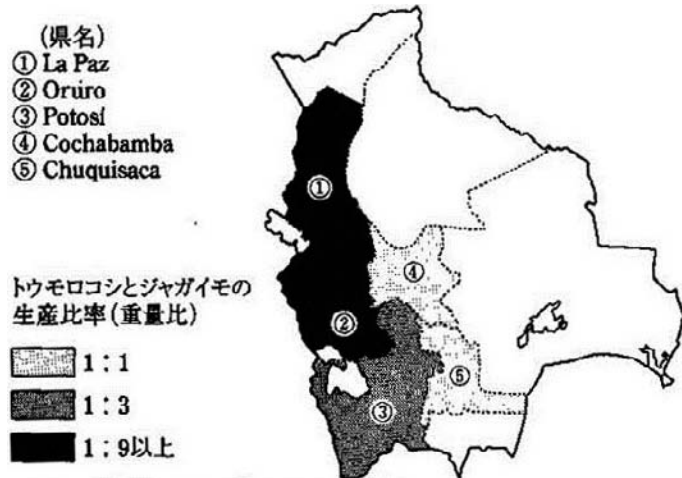
こうして見てくると、中央アンデスではジャガイモなどのイモ類を主食にしている人たちが少なくなさそうである。ただし、これまで食生活について検討した地域は中央アンデスのなかでも南部地方に集中していた。この中央アンデス南部高地は、クロニスタたちも「主食はジャガイモである」と述べていた地域であり、その伝統が現在まで維持されているのかもしれない。それでは、中央アンデスのなかで北部地域はどうなっているのであろうか。

残念ながら中央アンデスの北部地方については人類学的調査が乏しく、食生活についての資料も得られない。しかし、これまで見てきたことでも明らかなように中央アンデスの主作物はジャガイモとトウモロコシと考えてよいであろう。そこで、中央アンデスにおけるトウモロコシとジャガイモの生産量を比較してみよう。本書の冒頭で述べたように、トウモロコシ農耕がアンデス文明をささえたという説に私が疑問をもったのは、トウモロコシよりジャガイモの栽培面積の方が大きいという印象をもったからであった。さて、この印象ははたして正しかったのか。

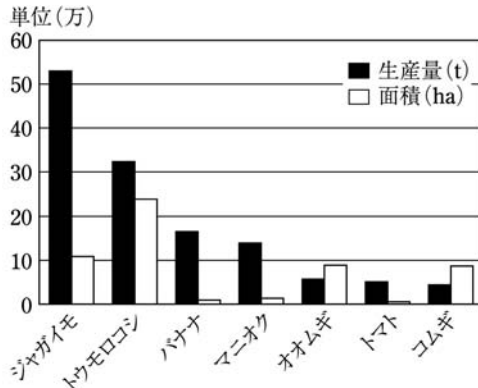
図終-4～5は中央アンデスの山岳地帯における主だった県ごとのトウモロコシとジャガイモの生産量を比較したものである。この図で見るかぎり、ペルーでもボリビアでも、アンデスの山岳地域に位置する県ではほとんどのところでトウモロコシよりジャガイモの方が生産量は大きい。すなわち、アンカッシュ県、カハマルカ県、ラ・リベルター県などの北部ペルーではトウモロコシの生産量（重量）を1とすると、ジャガイモはおおよそ2～2.5となる。中部のワヌコ県、フニン県、アヤクーチョ県などでは、この比率が



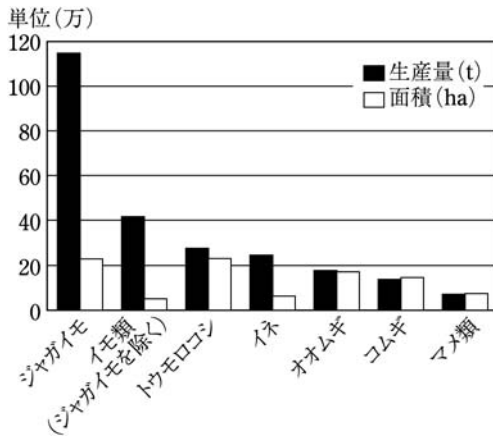
図終-4 ペルー・アンデスにおけるトウモロコシとジャガイモの生産比率(1955-57年) [Ministerio de Agricultura, Perú 1959] のデータをもとに作成



図終-5 ボリビア・アンデスにおけるトウモロコシとジャガイモの生産比率(1968年) [Barja y Cardozo 1971] のデータをもとに作成



図終-6 ペルーにおける主要な食用作物の生産量と耕作面積 (1955-57年の平均) [Ministerio de Agricultura, Perú 1959] より作成



図終-7 ボリビアにおける主要な食用作物の生産量と耕作面積 (1961-63年の平均) [Barja y Cardozo 1971] より作成

1対5となる。南部のクスコ県やアプリマック県などでは1対7、ペルー最南部のプーノ県にいたっては1対55とジャガイモの生産量の方が圧倒的に大きい。このような傾向はボリビア領に入ってもかわらない。たとえば、プーノ県の隣に位置するラパス県でもジャガイモの生産量はトウモロコシの15倍にもなり、オカでさえもトウモロコシの約2倍も多く栽培されているのである。

この資料から見るかぎり中央アンデスではトウモロコシよりジャガイモの方を多く栽培しているという、私の印象は間違っていなかったようである (図終-6~7)。地域によってはジャガイモよりトウモロコシを多く栽培しているところもあるに違いないが、中央アンデス全体として見ればジャガイモ栽培がトウモロコシ栽培を圧倒していると考

えてよさそうである。

これらの資料によれば、中央アンデスのなかでもペルー中南部からボリビア北部にかけての山岳地域は、とくにジャガイモ栽培が卓越している。その背景には、そこがアンデスのなかで標高が高く、また高原の幅も広くて、トウモロコシよりジャガイモの栽培に適した土地が多くあるという事情がありそうである。しかし、これを自然環境の特徴だけに求めるわけにはゆかない。それというのも、中央アンデス中南部高地はジャガイモ栽培が量的に卓越しているだけではなく、ジャガイモ栽培に関する興味深い特色がいくつも見られる地域だからである。

そのひとつが、ジャガイモの倍数体利用である。先述したようにジャガイモには倍数性の異なる7種もの栽培種が知られているが、それが集中しているのも中央アンデスの中南部高地である。図終-8はアンデスにおけるジャガイモ栽培種の分布を倍数体別に示したものであるが、それによればペルー中部からボリビアにかけての山岳地域では2倍体から5倍体までの倍数性の異なるジャガイモが栽培され、しかも、それぞれの種ごとに多様な品種がある。

植物学的には、ジャガイモはティティカカ湖畔を起源地とする作物であるが、それから多様な品種が生みだされたおかげで多様な環境のなかで広く栽培することが可能になった。とくに、ルキ・ジャガイモに代表される耐寒性の強いジャガイモは他の作物が栽培できない標高4000m以上の高地でも栽培が可能であり、これが中央アンデスにおける農耕限界を大きく引き上げた。このジャガイモの栽培化もその後の品種の多様化も、いずれもアンデス住民による貢献であることを考えると、中央アンデスの中南部高地での広大なジャガイモ栽培は環境のせいだけではないことが明らかであろう。

ジャガイモの倍数体利用が発達した地域は、イモ類の加工技術が特異的に発達した地域でもある。先述したように、ルキ・ジャガイモは煮ただけでは食べられない「苦いジャガイモ」であり、それを食用にするためには加工の必要がある。その加工されたジャガイモこそが第7章で紹介したチューニョやモラヤであるが、この加工法には先述したように様々なバリエーションがある。

これらの加工されたイモは、チューニョと同じように貯蔵や輸送に便利なものになっている。そのため、先のクロニカで見たように何人ものスペイン人がチューニョについて言及している。一般にイモ類は水分を含んでいるため、穀類に比べて重く、腐りやすいという欠点をもつが、チューニョ加工に代表されるイモ類の加工技術はこの欠点を解決したのである。

その意味で、この加工技術の開発は特筆すべきものであるが、この技術は第7章で検討したようにアンデスのなかでも中央アンデス中南部高地でしか知られていない。北部アンデスでも南部アンデスでもジャガイモは栽培されているが、そこではイモ類の加工技術はまったく知られていないのである。従来、チューニョに代表されるイモ類の加工



図終-8 ジャガイモ栽培種の分布 ([Hawkes 1978b] による)。2 倍種は、4 倍種の分布とほぼ重なるため省略している

技術の分布が中央アンデス高地に限定される理由としては、それが凍結・乾燥というプロセスを経なければならないためバナのように特異な環境条件のもとでのみ加工が可能であるとされていた。たしかに、チューニヨ加工は凍結・乾燥というプロセスが必要なので、気温の日較差がきわめて大きい乾季のバナでないと加工は困難である。しかし、アンデスのジャガイモ加工技術のなかには凍結・乾燥というプロセスを経ないものもあり、この方法であればバナだけでなく、広い地域で加工できる。にもかかわらず、この方法も北部アンデスや南部アンデスでは知られていないのである。

ちなみに、中央アンデス高地ではジャガイモだけに加工技術が発達したわけではなく、



先述したようにオカやオユコなどのイモ類も加工される。とくに、オカはジャガイモと同じように水晒しを加えて大量に加工されることもある。こうして加工されたオカは、チューニョと区別してカーヤと呼ばれるのである。

この事実は、中央アンデス高地におけるイモ類の加工技術の特異な発達を物語るものである。その背景には、中央アンデス高地におけるイモ類栽培のきわめて長い歴史とイモ類を重要な食糧源にしてきた人びとの暮らしがあった。そのような歴史や暮らしのなかでアンデス高地の人びとは有毒のイモ類を利用するために加工技術を開発し、ジャガイモをはじめとする多様なイモ類を栽培化したと考えられる。この点についてはすでに述べたとおりであるが、これはのちに根栽農耕文化と呼べそうな農耕文化へと発展していったようである。

## 6 根栽農耕文化への展開

ジャガイモ、オカ、オユコ、マシユア、マカ、ラカチャ、ヤコン、アチラ、これらはいずれもアンデス原産のイモ類であり、現在も広く栽培されているが、アンデスで生まれた穀類はひとつもない。そのため、アンデスでの農耕の中心は本来的にはイモ類ではなかったのかと第2章で述べた。このように考えたのは私がはじめてではない。古くは、著名な地理学者のカール・サウアーも1952年に著書『農業の起源』のなかで同様の指摘をしている。

すなわち、彼は農耕を種子によって繁殖させる種子農耕とイモなどの栄養体によって繁殖させる栄養体農耕の2つにわけた。つまり、栽培植物は、その繁殖の方法から見ると大別して2つのグループにわけられるのである。

ひとつは、種子をまいて発芽させ、それを育てたあとに種子を収穫するという方法である。イネやムギ、ヒエ、キビなどの穀類はすべて、このグループにはいるし、マメ類やトウモロコシもそうである。もうひとつのグループは、植物を繁殖させるのに種子をもちいないで、栄養体繁殖をさせる方法である。つまり、地下茎や塊根、さらに茎などの栄養体によって繁殖させるものである。このグループにはいる栽培植物としては、タロイモやヤムイモ、ジャガイモ、サツマイモなどのイモ類のほか、バナナやパンノキなどが知られている。

そして、サウアーによれば、アメリカ大陸は、メキシコから中央アメリカにかけての種子農耕文化圏と南アメリカの栄養体繁殖農耕文化圏にわけられるというのである。実際に、メキシコから中央アメリカにかけての地域で生まれたトウモロコシをはじめ、インゲンマメやカボチャなどは、いずれも種子繁殖をさせる作物である。一方、南アメリカではマニオクやヤウティア (*Xanthosoma sagittifolium*)、ジャガイモ、オカ、マシユアなど、南米原産の作物の大半が栄養体繁殖のイモ類であるとされる。

たしかに、中米から南米にかけての地域を歩き回ってみると、この指摘にはうなずける点が多い。たとえば、中米のメキシコやグアテマラではトウモロコシが他の作物を圧倒しているが、イモ類はわずかししか栽培されていない。一方、アマゾン流域を歩くと、そこでは大体どこでもマニオク（キャッサバ）が主作物である。そのマニオクの畑に混植されているのもヤウティアやヤマイモなどのイモ類であり、トウモロコシは部分的に栽培されているに過ぎない。そして、中央アンデス高地もジャガイモをはじめとするイモ類を主作物にしている地域なのである。

このサウアー説を発展させたのが、農耕文化研究で著名な民族植物学者の中尾佐助であった。中尾は栄養体繁殖農耕を根栽農耕と呼び、その代表的な地域として東南アジアの熱帯降雨林地帯をとりあげた。そして、その主な特色として次のようなものをあげている [中尾 1966: 22-56]。

- ① 無種子農業であること。すべての作物の繁殖は根分け、株分け、さし木など、栄養繁殖のみでおこなわれている。
- ② 倍数体利用が進歩している。品種改良が多面的に進展し、なかでも倍数体利用がおどろくほど進歩している。
- ③ マメ類と油料作物を欠くこと。根栽農耕文化はイモ類が主力で穀物を欠くことがまず特色としてあげられるが、マメ類と油料作物も欠く。そのため、根栽農耕文化の食事内容はデンプン質と糖分に集中し栄養的に偏っており、栄養のバランスをとるためには小規模の狩猟や漁撈が必要となる。
- ④ 掘り棒の農業。根栽農耕の農具は掘り棒だけである。掘り棒で植え付けをすると、点植え式になり、条植えやバラ播き型の植え方はやりにくい。
- ⑤ 裏庭から焼畑へ。根栽農耕の畑は裏庭型ともいべきもので、キッチンガーデンとも呼ばれる方式である。この方式から重点作物をもっと多量に栽培しようとして専用の畑になると、焼畑が生まれてくる。

これらの特色を見ていると、中央アンデス高地のジャガイモを中心とした農耕も根栽農耕といってよい。少なくとも、ここであげられている根栽農耕文化の特色の①も②も中央アンデス高地の農耕は満たしているからである。中央アンデス高地にはキヌアなどの雑穀やタルウイなどのマメ類も栽培されているが、その中心はジャガイモやオカ、オユコ、マシユアなどのイモ類である。また、ジャガイモについては2倍体から5倍体までの倍数性の異なる栽培種の利用が知られている。さらに、③についても少なくとも油料作物を欠いているという点では共通している。

実際に、中尾もアメリカ大陸における根栽農耕文化の存在を次のように指摘している。

「……このイモ栽培を特色とする農耕文化は東南アジアの熱帯降雨林の中だけで発生したものではない。(中略) アメリカでは東南アジアに発生した根栽農耕文化と性格的にきわめてよく似た根栽文化が独自に起源している」。(中尾 1966: 50-51)

そして、南アメリカではマニオクを主作物としベネズエラを発生地とする熱帯低地起源の根栽農耕と、ジャガイモを主作物としペルーやボリビアの高地を発生地とする冷温帯起源の根栽農耕の2つの根栽農耕文化圏があることも中尾は指摘している。

ただし、南アメリカの根栽農耕文化については注意しなければならないことがある。それは、アマゾン川流域などの熱帯低地で発達した根栽農耕文化と中央アンデス高地のそれとは大きく異なることである。じつは、私自身もアマゾン低地で調査をしていたとき、イモ類を主作物として栽培していても、アマゾン低地と中央アンデス高地では農耕方法も人びとの暮らし方もこれほど違うものかと驚いた記憶が残っている。そこで、このアマゾン低地の根栽農耕についても比較のために少し紹介しておこう。

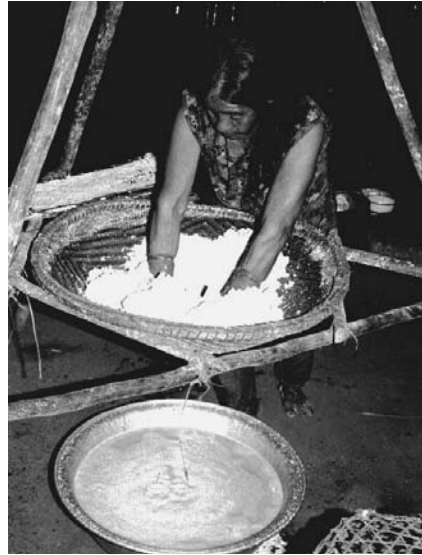
アマゾン川流域の熱帯低地における先住民のほとんどは焼畑農耕民であり、そこでの主作物はだいたいどこでもマニオクである。ヤムイモやヤウティアなどのイモ類もしばしば栽培されているが、主作物はマニオクである。ただし、このマニオクはアンデスで栽培されているものとは異なり、有毒のものである。じつは、マニオクには煮ただけで食べられる無毒のマニオクと、多量の青酸性の有毒成分を含む有毒マニオクがある。そして、アマゾン川流域の焼畑農耕民が主食にしてきたのは、後者の有毒マニオクの方な



図終-9 有毒マニオクと無毒マニオクの分布 [Renvoize 1972] より



写真終-2 まず、マニオクの皮をむいたあと、おろし金でイモをすりおろす



写真終-3 すりおろしたデンプンに何度も水をかけ、両手でよくもんで洗う



写真終-4 もみ洗いたしたデンプンを伸縮性のあるバスケットに詰め、これを引き絞って脱汁する



写真終-5 脱汁したデンプンを土鍋に薄く広げ、両面を焼く。焼き上がったパンは一般にカサーベの名で知られる

のである（図終-9）。

この有毒マニオクは植え付けてから8カ月ほどで食用になる大きなイモをつけるが、いったん掘りおこすと腐りやすいため、ほとんど毎日収穫にでかけてゆく必要がある。さらに、イモが有毒であるため、面倒な毒ぬきの処理が必要である。このため、マニオクのイモに含まれる有毒成分を取り除く様々な技術や道具がアマゾン川流域の各地で開発されてきた [Dole 1960]。

たとえば、私が調査のためにかつて数カ月ほど調査のために滞在したことのあるコロンビア・アマゾン流域でも焼畑農耕民はいずれも有毒マニオクを主作物にしており、それを様々な道具を使って毒ぬきをしていた（写真終-2～5）。そして、その毒ぬきをしたデンプンで一般にカサーベの名前で知られるパンをつくり、それを主食にしているが、これは高温多湿なアマゾン川流域では貯蔵性が悪い。そのため、毎日のように畑に出かけてゆき、マニオクのイモを掘りとってくる。つまり、畑がいわば貯蔵庫の役割を果たしているのである。

こうして、アマゾン川流域の焼畑農耕民は有毒マニオクの栽培、収穫、そして調理に、毎日きわめて長い時間を投下している。また、焼畑農耕そのものも広大な土地を必要とするため、人口の集中を妨げる要因となる。このような点で、アマゾン川流域の根栽農耕文化は東南アジアの熱帯林の根栽農耕文化と共通している。中尾も「いちばんアジアの根栽農耕文化に似ているのは南米の北部、カリブ海附近に発展した低地熱帯型の根栽文化で、キャッサバ（マニオク）が代表的なイモである」と述べている [中尾 1966: 181]。

しかし、中央アンデス高地で発達した根栽農耕文化は、アマゾン川流域や東南アジアのそれらとは大きく異なる。結論から先にいえば、中央アンデス高地の根栽農耕文化は中尾が提唱した根栽農耕文化よりもはるかに進んだ技術段階に達している、と私は考えている。たとえば、中央アンデス高地ではイモ類の加工技術や貯蔵技術を高度に発達させたが、これは他の地域では見られない大きな特色である。このほかにも中央アンデス高地の根栽農耕文化には他の地域にはない特色が認められる。そこで、以下では中央アンデスの根栽農耕文化に焦点をしぼり、その特色をさらに探ってみよう。

## 7 根栽農耕文化とラクダ科家畜

中央アンデス高地で人びとの暮らしを可能にしたのは、動植物の栽培化と家畜化であった。ジャガイモをはじめとする数多くの植物の栽培化は、人間の安定的な食糧源の確保に大きな役割を果たしたし、リャマやアルパカの家畜化も食糧や衣類、さらに燃料や肥料の点でも欠かせないものになったと考えられるからである。そのため、その後も作物の栽培と家畜の飼育は相互に密接な関係をもって発達してきたようである。とくに、

ジャガイモを中心とするイモ類栽培とリャマやアルパカなどの家畜飼育は、農牧複合といえるような生業形態を生みだした。

実際に、チャビン・デ・ワントルでは紀元前数世紀頃にジャガイモを中心とする作物栽培とラクダ科家畜の飼育を組み合わせた農牧複合の生業形態が確立していたが、この組み合わせはもっと古くから形成されていた可能性が大きい。ジャガイモの起源地もラクダ科家畜の起源地もチャビン・デ・ワントルではなく、中央アンデス南部高地であると考えられるからである。

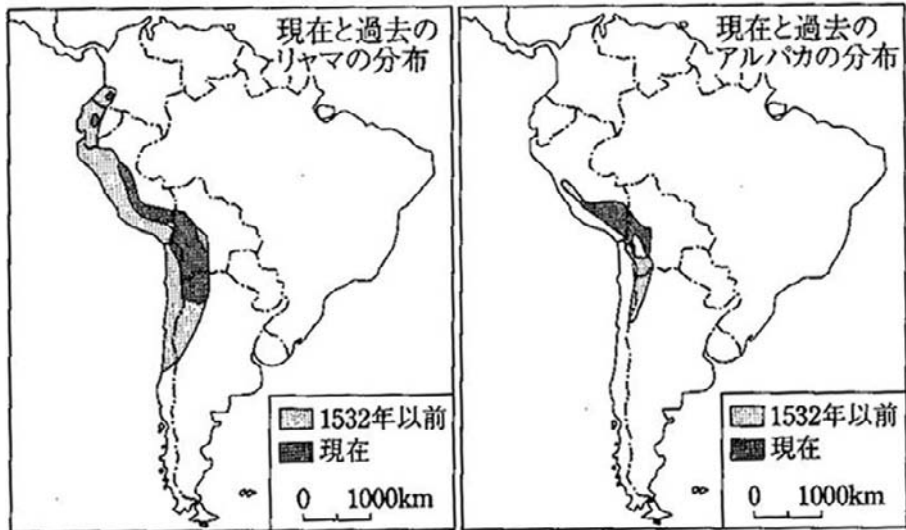
ラクダ科家畜の飼育とイモ類栽培の密接な関係には、いくつもの理由が考えられる。そのひとつは、第2章で見たようにアンデス住民が農耕開始以前からラクダ科動物と野生のイモ類をとともに利用する生活を長くつづけ、これらの動植物を家畜化および栽培化したことである。その生活はやがて農耕を中心とするものに変化していったと考えられるが、イモ類を中心とする生活ではタンパク質が乏しく、そのためにもラクダ科家畜の肉が不可欠になったに違いない [Jensen and Kautz 1974]。

この点でも中央アンデス高地の根栽農耕文化は中尾の提唱している根栽農耕文化とはレベルが異なるであろう。中尾は、根栽農耕文化の食事はデンプン質と糖分に集中した、栄養的に偏ったものであり、そのため狩猟や漁撈が必要になると述べているが、中央アンデス高地では狩猟や漁撈はほとんどおこなわれておらず、それにかわって家畜の飼育がおこなわれている。しかも、その家畜はブタやニワトリなどではなく、リャマやアルパカなどの放牧家畜である。牧畜社会では「家畜は生きた貯蔵庫」といわれるほど食糧源として重要であり、これが中央アンデスの根栽農耕文化を大きく支えたと考えられるのである。

一方、ラクダ科家畜の利用だけでは十分な栄養の摂取は難しい。アンデス住民は、ラクダ科動物を家畜化したものの、これらの乳の利用を知らなかったからである。このため、アンデス本来の牧畜経済はイモ類栽培の存在なしでは発達しなかったことが指摘されている [Murra 1965; Webster 1971]。

こうして農牧複合の暮らしが始まったと考えられるが、その暮らしはプナやスニなどの高地部に中心をおいたものにならざるをえなかったであろう。リャマもアルパカも放牧の中心はプナ帯であり、とくにアルパカはプナの環境に適応した家畜なので、その放牧のためには人びとも高地で暮らす必要があるからだ。ジャガイモやオカ、オユコ、マシュアなどのイモ類もプナあるいはスニで栽培化された作物なので、これらも高地で栽培する必要があった。現在のところ、ラクダ科動物の牧畜と根栽農耕の開始時期についての先後関係は明らかではないが、とにかく寒冷高地に適した農牧複合的な暮らしがチャビンよりもずっと古い時代に成立していたと考えられる。

ラクダ科家畜と根栽農耕との密接な関係は別の点でも重要である。それは家畜の糞尿の肥料としての利用である。インカ・ガルシラーソも述べていたように、インカ時代に



図終-10 リャマおよびアルパカの分布 [Novoa and Wheeler 1984] より

はジャガイモ栽培にラクダ科家畜の糞が肥料として利用されていた。この方法は現在も受け継がれ、ジャガイモ栽培にはリャマやアルパカ、さらにヒツジなどの家畜の糞尿が不可欠なものになっている。先にジャガイモ耕地は休閑されることを指摘したが、この休閑だけでは地力の回復は十分ではない。そのため、休閑地に家畜を放牧して糞尿を利用するだけでなく、家畜の糞を大量に集めてそれを肥料として利用するのである。この事実もまた、ラクダ科家畜の飼育とジャガイモ栽培との密接な関係を示すものであろう [Yamamoto 1985; 1988]。

この点で興味深い事実がある。先に根栽農耕文化が発達したところとして指摘した地域こそは、リャマやアルパカが豊富に分布している地域なのである。このことは、ラクダ科家畜が豊富に分布している中央アンデス南部高地でジャガイモ栽培が発達したことを示しているのである (図終-10)。

輸送力としてのリャマの貢献も忘れるわけにはゆかない。アンデスは高度差が大きく、そこでの物資の輸送は困難である。しかも、ジャガイモなどのイモ類は水分を多く含んでいるため、重くて輸送に不便である。しかし、リャマは1頭で30kg前後の荷物を運ぶことが可能であり、数十頭のリャマを使えば1トンもの荷物を輸送することができる。したがってリャマの利用は、重くて輸送に不便なイモ類を中心とする根栽農耕に大きな役割を果たしたと考えられるのである。

## 8 休閑システムの慣行

ペルーの中南部からボリビア北部にかけての高地ではジャガイモ栽培が卓越しているだけでなく、イモ類栽培の発達を示す特色がいくつも見られるため、私はそこを根栽農耕文化圏と呼んだ。この根栽農耕文化圏にあたる中央アンデスの山岳地域では興味深い慣行が見られる。それが先述したジャガイモ耕地の休閑システムである。先にマルカパタではジャガイモがアイユ共同体の共同耕地で栽培され、しかもジャガイモを1年栽培すると耕地は数年間休閑させると述べたが、この慣行がペルー中南部からボリビア北部にかけて広く見られるのである。この休閑システムの慣行も中央アンデスにおける根栽農耕文化の発達を物語る特色のひとつのようである。そこで、この休閑システムについて検討してみよう。

まず、マルカパタ以外の地域での休閑システムについて報告しておこう。いくつもの共通点が見られるからである。ここでは、アンデスの東斜面に位置するマルカパタと類似した環境をもつアマレテ、そしてマルカパタと環境的に異なる2つの地域、すなわちティティカカ湖にあるタキレ島とボリビアの高原台地にあるイルパ・チコ村を取り上げることとする。

### (事例1) アマレテ

アマレテは、ボリビア、ラパス県北部のBautista Saavedra郡の6つある地区(cantón)のうちのひとつである。アマレテ地区の領域面積についてはあきらかではないが、アマレテだけで郡全体の総人口10119人の1/3強を占める3630人の住民がおり、同郡最大の人口を擁する地域として知られる[木村 1985]。なお、アマレテ地区ではケチュア語を話す住民とアイマラ語を話す住民が併存している。

アマレテはマルカパタと同じようにアンデス東斜面に位置しており、その環境利用の方法もよく似ている。すなわち、住民は標高3800mあまりの高地に主居住地をもっているが、アンデス東斜面の大きな高度差を利用して低地部でトウモロコシ、その他の作物を栽培し、高地部で家畜の放牧、そしてこれらの中間地帯でジャガイモをはじめとするイモ類を栽培して、食糧に関してはほぼ自給しているのである。

このジャガイモの栽培ゾーンは高度によって2つにわけられる。煮るだけで食用となるジャガイモ用耕地カバナとアクがあるが耐寒性にすぐれているルキのジャガイモ用の耕地の2つである。そして、これらの耕地の運営は地域社会の規制のもとにある。すなわち、カバナでは初年度にジャガイモ、2年目にオカ、3年目にオオムギ、4年目にソラマメがつづいて植え付けられ、2年間の休閑を経たあと、あらためてジャガイモが栽培されることが決められているのである。ただし、ルキの耕地は1年間だけ栽培したあと、6年間休閑される。





写真終-6 アマレテの集落

施肥の方法は、ルキの耕地ではマルカパタのブナスニでおこなわれているものと同じで、リヤマヤアルパカなどの糞を耕地に直接あたえる。カパナでもこの方法はとられているが、中心となるのはヒツジの囲い場 (*lluku* と呼ばれる) を移動することによって施肥がおこなわれる方法である [木村 1985]。なお、この方法でリヤマヤアルパカが使われず、ヒツジが使われるのは、ヒツジの糞が肥料としては最も効率がよいと信じられているからである。

なお、アンデスでは、ふつう、家畜の世話は子どもの仕事になっているが、このような施肥を目的として *lluku* を使うときは大人が作業の中心になり、しかも夜間は *lluku* の近くに小屋がけをして泊り込んでヒツジの番にあたる。また、施肥はジャガイモの植え付けのときにかぎられ、2年目以降の耕地ではおこなわれない。

#### (事例2) タキレ島

タキレはペルー領のティティカカ湖にうかぶ周囲10kmあまりの小さく、細長い島である。同島は美しい織物の生産地として知られていることから現在観光地にもなっている。住民の母語はケチュア語で、いずれも農業に従事し、この農業で食糧は基本的に自給している。センサスによれば、島の人口は1940年当時215人であったが、1981年には1147人に増えている [Matos 1986]。

島にはかぎられた土地しかなく、また平坦地が少ないため、全島のほとんどが傾斜地をテラス状にした階段耕地として利用されている。さらに、利用できる高度差も標高約3800mの湖岸から4000mくらいの200m足らずしかなく、マルカパタのように異なった高度域にいくつもの耕地をもつことは不可能である。このため、ジャガイモだけでなく、オカ、ソラマメ、オオムギなども同じ高度域のなかで栽培し、しかもその栽培面積はジャガイモのそれに匹敵するほど大きい。次に、これを具体的に見てみよう。



図終-11 タキレ島の6つのスーヨ (耕区) [Matos 1957] より

図終-11に見られるように、タキレは島全体がスーヨと呼ばれる6つの耕区にわけられている。これはマルカパタのムユに相当するものであり、ここに各世帯はそれぞれの耕地をもつ。そして、それぞれのスーヨには島民のなかから選出された番人がおかれ、家畜の侵入などに対して注意がはられる。すなわち、スーヨでの栽培利用は、マルカパタと同じように島民の管理下であり、毎年、各スーヨで栽培される作物も決まっている。つまり、タキレ島では輪作システムがとられているのである。

輪作の順序は聞き得た情報では、次のとおりである。1年目はジャガイモ (写真終-7)、2年目がオカ、3年目がソラマメ、4年目がオオムギ、そして5年目と6年目は休閑される。そして、毎年、これらのスーヨに植え付けられる作物も、その順番も決まっているため、それぞれのスーヨは栽培される作物名をつけて、しばしばパ・スーヨ (ジャガイモの耕区)、オカ・スーヨ (オカの耕区)、アバ・スーヨ (ソラマメの耕区)、セバダ・スーヨ (オオムギの耕区)、そして休閑地はワサラと呼ばれる。



写真終-7 タキレ島のジャガイモ耕地。後方はティティカカ湖



写真終-8 ヒツジの糞尿による施肥。柵囲いは毎日移動させられる

この輪作システムで興味深い点は、休閑を終えた耕地で最初に植え付けられるのが常にジャガイモであるという点である。しかも、このジャガイモの植え付け前には耕地に必ず肥料が与えられる。2年目以降の耕地にも施肥することがあるが、その肥料の量はジャガイモの場合と比べるとかなり少ない。ただし、その施肥方法はマルカパタでは見られなかったものである。

じつは、島には休閑地以外に家畜を放牧できるようなところはほとんどない。このため、リヤマやアルバカは見られず、島で飼われている家畜はわずかばかりの牛と世帯平

均の所有頭数がせいぜい10頭前後のヒツジだけである。これらのヒツジは休閑地に放牧されているが、それだけでは地力回復が十分ではないので、植え付け前にヒツジの群を休閑地内にもうけた移動可能な柵囲いの中に追い込み、そこで夜間は休ませて排泄させる。排泄された糞や尿は土でおおい、乾燥をふせぐ。また、日中は柵囲いから出して放牧するが、この柵囲いは家畜の頭数の多いときは1日、ふつう3日ごとに移動させ、夜間はこの中で家畜を休ませる。この方法（ワニューチと呼ばれる）によって、ヒツジの尿や糞が耕地全体に一様に排泄されるように工夫されているのである（写真終-8）。

### （事例3）イルパ・チコ

イルパ・チコは、ボリビア最大の都市であるラパスに近く、高原台地上の標高3800～3900mの平坦地に位置している。おおよそ72平方kmの広さのところに人口が2845人、人口密度は40人／平方kmである [Carter y Mamani 1982]。近くにトウモロコシなどを栽培できる低地がないため、ジャガイモをはじめ農牧活動はもっぱらこの高原でおこなわれる。住民は、すべてアイマラ語を母語とする先住民である。

さて、イルパ・チコでは、土地はサヤーニャとアイノカと呼ばれる2つのタイプに分けられる。サヤーニャは土地が肥沃で排水もよく、そこでは作物栽培や家畜飼育がおこなわれるだけでなく、古くから家屋が建てられ、居住地にもなってきたところである。一方、アイノカは基本的にサヤーニャのまわりに広がる耕地であり、ジャガイモをはじめ主要な食糧源になる作物が栽培されているところである。また、サヤーニャの利用が個人にまかせられているのに対し、このアイノカでの栽培利用はイルパ・チコ住民の共



写真終-9 ジャガイモのアイノカ。イルパ・チコ村では共同耕地は輪作され、初年度はジャガイモが栽培される

同体的な規制のもとにある。

すなわち、アイノカは6つの区画にわけられ、休閑後最初のアイノカではジャガイモ、2年目にキヌア、3年目にオオムギ、そしてこのあと、3年間休閑されることが決められている。したがって、先のタキレ島のスーヨのように、アイノカはそれぞれ栽培される作物名をつけてパパ・アイノカ（ジャガイモの耕区）、キヌア・アイノカ（キヌアの耕区）、セバダ・アイノカ（オオムギの耕区）、そして休閑地はアイノカ・カイパと呼ばれる（写真終-9）。

この休閑地は家畜の放牧に利用されるが、ジャガイモの栽培の際にはやはり肥料が必要となる。イルパ・チコでは2つの施肥方法があり、ひとつはこれまで見てきた家畜の糞を直接耕地に与えるものである。もうひとつは、以下で述べるような、いささかかわった方法である。すなわち、ヒツジは年間をとおして夜間は家屋の近くの家畜囲いのなかで休ませるが、この囲いには糞尿が集積され、そしてそのかたまりができる。このかたまりの表層のすぐ下に緑色を呈する部分（ヒリと呼ばれる）ができるが、それを集めて砕いたものを水とまぜあわせる。そして植え付ける前に、これを種イモに塗布するのである。家畜の糞が十分に得られないときは、このヒリだけで栽培することもあるが、確実な収穫を得るためには上記の施肥方法のどちらも必要となる [Carter y Mamani 1982: 90]。しかし、この場合、ヒリの施肥効果が大きいため、肥料としての家畜の糞の量は種イモと等量ですむ、といわれる。

以上、アマレテ、タキレ島、そしてイルパ・チコのジャガイモ栽培の休閑システムについて紹介した。これにマルカパタの事例をくわえて比較したものが表終-1である。この表を参考にしながら、ここで一応のとりまとめをおこなっておこう。

表終-1 ジャガイモ耕地の輪作と休閑 [山本 1988]

地 域	高 度	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	6年目
マルカパタ							
マワイ	3000~3400m	ジャガイモ	休 閑	休 閑	休 閑	休 閑	ジャガイモ
チャウピマワイ	3400~3700m	〃	〃	〃	〃	〃	〃
ブナ	3700~4100m	〃	〃	〃	〃	〃	〃
ルキ	4100m以上	〃	〃	〃	〃	〃	〃
アマレテ							
カバナ	3500~4000m	〃	オ カ	大 麦	ソラ豆	休 閑	休 閑
ルキ	4000m以上	〃	休 閑	休 閑	休 閑	休 閑	休 閑
タキレ							
	3800~4000m	〃	オ カ	ソラ豆	大 麦	休 閑	休 閑
イルパ・チコ							
	3800~3900m	〃	キヌア	大 麦	休 閑	休 閑	休 閑

- ① ジャガイモは連作されることはなく、また、その栽培は休閑をとまなう。
- ② 輪作システムのなかでジャガイモは、常に最初の年に植え付けられる。
- ③ 輪作される時も、肥料が与えられるのはほとんどジャガイモ栽培だけにかぎられる。
- ④ ジャガイモの主要な栽培地帯であるプナヤスニ帯では、その栽培のために家畜の糞尿が肥料として不可欠である。
- ⑤ ジャガイモ耕地の利用は地域社会の共同体的な規制のもとにある。

これらのジャガイモ栽培の特色は、いずれもアンデス住民にとってジャガイモがきわめて重要な作物であることを物語る。とくに、輪作システムのなかで常にジャガイモが初年度に植え付けられ、施肥もほとんどジャガイモの植え付けのときにかぎられることは、ジャガイモが輪作される作物のなかで最も重要なものであり、その栽培に最も力がそそがれていることを示すものであろう。

このジャガイモの休閑システムおよび輪作システムについては、私の調査のあと、アンデス各地の事例をまとめて分析した報告が刊行された [Orlove and Godoy 1986]。それによれば、休閑システムは中央アンデス各地で広くおこなわれており、休閑期間にはかなりのバリエーションがあるものの、初年度に植え付けられるのは例外なくジャガイモであり、またジャガイモ栽培後の2年目以降の共同耕地は、何も栽培しないで休閑地にしてしまう例の少なくないことも指摘されている。このような事実も、共同耕地の第一義的な目的がジャガイモ栽培にあることを物語っているのである。

この調査報告は、もうひとつの興味深い事実を指摘している。それは、ジャガイモの休閑システムの慣行が中央アンデスの中南部高地にかぎられることである。具体的にいうと、それはペルーの中南部およびボリビアの山岳地帯（標高2400mから標高4200m）だけである。

このこともまた中央アンデス高地における根栽農耕文化の発達を物語るものであろう。ジャガイモは古くからアンデスの広い地域で栽培されてきたにもかかわらず、休閑システムが見られる地域は中央アンデスの山岳地帯だけだからである。本書の冒頭で指摘したように中央アンデス高地の環境は脆弱で生産性の低い山岳地帯にあり、しかもジャガイモは病害虫によい作物である。このような環境条件のもとで、休閑システムは安定的な生産を維持するために中央アンデス高地の人たちが開発した方法であったと考えられるのである。

ところで、このジャガイモ耕地の休閑を特徴づけるもののひとつに土地利用の共同体的規制があった。すなわち、先のマルカパタの *manda*、タキレの *suyo*、イルパ・チコの *aynoca*、アマレテの *kapana* などのジャガイモ耕地はいずれも当該地域社会の何らかの規制のもとに運営されていた。そして、このようなジャガイモ耕地の共同体的な規制は、

これら4地域にかぎらず、広く中央アンデス高地で見られることが知られている。[Mayer 1985; Orlove and Godoy 1986]。そこで、この共同体的規制についてもとりあげておこう。

ジャガイモ耕地の共同体的規制が中央アンデス高地で広く見られることの背景には、家畜飼育との関係があるようだ。というのも、先に見たようにジャガイモの主要な栽培高度域であるプナヤスニはリヤマ、アルパカそしてヒツジなどの放牧地帯にもなっている。このため、放牧中の家畜がジャガイモ栽培中の耕地に侵入して作物に被害をあたえる恐れがあり、これを防ぐために耕地のまわりに柵や石垣をめぐらせるのである。

また、ジャガイモ栽培中の耕地に番人をおいたり、収穫や植え付けの時期を地域社会で決定するのも、主としてこの放牧家畜の侵入に対する方策である。いずれもこれらの作業を個人でおこなうとすればかなりの困難をとまなうため、地域社会の共同労働としておこなわれているのである。そして、この地域社会がいずれも地縁血縁的な色彩のこいものであり、またジャガイモやリヤマ、アルパカなどが中央アンデス高地で古くから重要な役割をになってきた家畜や作物であることを考えると、このような共同体的な規制は家畜飼育とジャガイモ栽培のあいだの競合する関係を解決するものとして、おそらくきわめて古い時代に形成されたものであろう。

しかし、ジャガイモ栽培と家畜飼育のあいだには、このような競合関係だけではなく、相互に補完的な関係もある。そのひとつが、これまで見てきたように家畜の糞の肥料としての利用である。また、休閑地への家畜の放牧は牧草が利用できる利点があるとともに、家畜の糞尿によって草地の形成を促進し、地力の維持や土壌の劣化の回避などにも役立っている。すなわち、ジャガイモ栽培と家畜飼育のあいだには、土壌をめぐって、生態的な補完関係があるのだ [Yamamoto 1985]。とくに、先述したようにアンデス高地の土地の生産性がけっして高くなく、またきわめて脆弱な環境であることを考慮にいれるならば、地力の維持は地力の回復にもまして重要であると判断される。

したがって、この共同体的な規制は、単に家畜飼育と農業のあいだの関係を調節するものであるだけでなく、土地の永続的な利用にも大きな役割をはたしているものと考えられる。とくに、共同体的規制をとおして可能となる休閑は、土地の生産性が低く、しかも脆弱な環境のなかで、重要な食糧源であるジャガイモの安定的な生産に対して大きな貢献をはたしている。おそらく、休閑はこのような様々な役割をになっているからこそ、ジャガイモが最も重要な食糧源となっている中央アンデス高地で依然として広くおこなわれている、と考えられるのである。

一方で、この休閑システムが人口圧などの影響で変化しつつあることが、先の事例からもうかがえる。というのも、マルカパタの例で見たように、この共同耕地はジャガイモだけを栽培したあと休閑させられる方法が本来のものではなかったか、と思われるからだ。それが人口の増加にともない、食糧の増産をはかるために、輪作システムの導入、

休閑期間の短縮を余儀なくされるようになったと考えられるのである。

なお、この休閑システムを支えた農具の発達も見落とせない。中尾は根栽農耕文化の特色のひとつとして掘り棒の使用をあげていたが、この点でも中央アンデス高地は特異的な地域である。なんども述べたように中央アンデス高地では踏み鋤が開発されているからである。すなわち、中央アンデス高地では掘り棒の技術的段階にとどまらず、そこから鋤へ、さらに鋤から踏み鋤へと発達したのである。この踏み鋤の開発が示すように、先スペイン期のアメリカ大陸では中央アンデス高地は農具の最も発達した地域だった。こうして見ると、農具としては掘り棒しか使われない根栽農耕に比べて中央アンデス高地の根栽農耕は生産性の点で一段と進んだ段階にまで達していたといえる。いいかえれば、中央アンデス高地の根栽農耕を他地域の根栽農耕と同じレベルで扱うことはできないのである。

## 9 寒冷高地型の根栽農耕

以上、中央アンデス高地でおこなわれている農耕を根栽農耕としてとらえ、その特徴を探ってきた。その結果、中央アンデス耕地の根栽農耕は、中尾が定義した東南アジアの根栽農耕と共通する特徴をいくつももちながら、一方で大きく異なる特徴をもつことも明らかになった。中尾の定義による根栽農耕との違いの主なものは次のとおりである。

- ① 作物栽培と家畜飼育が密接な関係をもつこと。家畜飼育は、栄養源としてタンパク質を供給するだけでなく、糞尿の利用によって肥料を供給し、施肥の慣行を生み出した。
- ② ジャガイモを持続的に栽培するために休閑システムを開発したこと。この休閑は、ジャガイモの病害虫の防除に大きな役割を果たしている。
- ③ 踏み鋤の農業。踏み鋤は掘り棒よりも深く耕起することが可能であり、休閑地の耕起に欠かせない農具となった。
- ④ イモ類の加工技術の発達。この発達により、水分を多く含み、腐りやすいイモ類を長期にわたり貯蔵可能にし、輸送にも便利なものにした。

では、このような違いはなぜ生まれたのだろうか。その最大の要因は両者における生態的な違いであろう。それというのも、中尾が典型的な根栽農耕文化としてあげた東南アジアや南米の北部などは熱帯低地に位置しているのに対し、中央アンデス高地は熱帯高地に位置しているからである。おおまかにいえば、前者の地域は高温で湿潤な気候のところであり、後者の地域は寒冷で比較的乾燥した気候のところである。したがって、ここで検討してきた中央アンデス高地の根栽農耕は、寒冷高地という特異な環境に人び



とが適応するために技術的、社会的に発達させてきた生業といえるだろう。

さて、この寒冷高地とは具体的にはどこか。私は、湿潤プナを念頭においている。根栽農耕の中心となるラクダ科家畜もジャガイモなどのイモ類も、湿潤プナでドメスティケートされたと考えられるからである。さらに、湿潤プナとその下に位置するスニ帯まで含めれば、そこそはジャガイモ栽培が卓越し、その大きな多様性も見られる地域である。また、そこはジャガイモの安定的な生産を目指して休閒システムをとっており、そのために踏み鋤が効果を発揮している地域でもある。したがって、この湿潤プナで育まれた生活様式が見られる地域を私は寒冷高地型の根栽農耕文化圏として提唱したい。

では、この寒冷高地型の根栽農耕文化圏の存在は中央アンデスを理解するうえで、どのような意味をもつだろうか。ここで、冒頭で問題にした中央アンデスの文化領域を想起していただきたい。増田 [1980] が指摘するように、中央アンデスには多様な環境が見られる一方で、全地域を一貫した文化的統一性が見られ、多くの側面にわたって中央アンデスの住民は基本的要素を共有するとされる。ただし、その統一性の具体相や構造について論じられることは、ほとんどなかった。

そのため、中央アンデスの領域は考古学や民族学の分野にかぎっても研究者によって様々に異なっている。古くは、Bennet [1946] が有名な *Handbook of South American Indians* のなかで、ペルーの海岸地帯と高地、そしてボリビアの高地を「古くからの文化的ブロック」として中央アンデスの領域を提示した。また、StewardとFaronは、灌漑を指標として中央アンデスの領域をほぼ現在のペルーの国土に限定した [Steward and Faron 1959]。一方で、地理学者は先述したように、中央アンデスの領域をもっと広くとらえてきた。そして、近年、地理学者のGade [1999] にいたっては、この地域をさらに広げ、北はエクアドル、南はチリ北部までを中央アンデスとしている。

このような状況を生みだした原因のひとつは、増田 [1980] も指摘しているように、これまでの研究が文化の全体的統一性と特定社会の結びつきについてほとんど考察してこなかったからであろう。また、中央アンデスの特徴づける生態的条件についても十分に検討してこなかったことも指摘できよう。そこで、まず私が注目したのが中央アンデスの生態的条件、とくに中央アンデスを南北に貫くプナの存在であった。地理学者のTroll [1968] が指摘したように、プナは気候や植生のうえで北部アンデスと中央アンデスを区分する大きな指標になり得るからである。

一方、中央アンデスと南部アンデスを区分するものとして、私が注目したのが湿潤プナの存在であった。これまで地理学者が指標としていた地形のみに注目すれば、乾燥プナや砂漠プナが位置する地域までを中央アンデスとしなければならないが、文化的な領域としての中央アンデスは人間が居住し、アンデス的な生活様式が見られる湿潤プナでなければならない。このアンデス的な生活様式こそが寒冷高地型の根栽農耕にほかならない。そして、これまでアンデスといえば、もっぱら大きな高度差とそこに見られる多

様な環境が注目されてきたが、そこには等質的な環境である湿潤プナがかなり大きな長さをもって広がっている。そして、この湿潤プナが共通の生態的基盤となって、そこで高冷高地型の根栽農耕文化が展開、それが多様な環境を有しながら中央アンデスの統一性を生んだ要因のひとつになったと考えられるのである。

この高冷高地型の根栽農耕は、すでに検討したように収穫の安全性を求めて二重三重にリスク分散の方法がはかられており、持続性に富んだ生業である。このような特色をもった農耕文化が花ひらいたからこそ、中央アンデス高地は長年にわたり多数の人間が暮らすことができたのであろう。インカ帝国は1千万とも2千万ともいわれる大人口を擁し、その大半が中央アンデスの山岳地帯に住んでいたことが知られている。また、現在、中央アンデスは地球上の高地のなかで、最も多数の人口を擁する地域としても知られているが「アンデス世界では、農村部で餓死者が出たことがない」[木村 2004]とされる。この背景にも、中央アンデス高地の農業が生産性を第1目的とするものではなく、安定性を第1に考えておこなっているからこそであると考えられる。

おそらく、中央アンデス高地の農業がこのような特色をもっていたからこそ、そこでは数千年にわたり多数の人間が住み、最終的にはインカ帝国に代表される山岳文明を生むことが可能になったのであろう。では、インカ帝国滅亡から500年近くたった現在、21世紀に生きるアンデス農民にとって、この伝統的な農業に問題はないのであろうか。じつは、ほとんどのアンデス農民が伝統的な農業に満足していない。彼らに聞いてみると、ほとんどの農民が収量の低いことを嘆いているのである。

実際に、生産性という点で見れば伝統農業はきわめて低いレベルにとどまっている。たとえば、欧米諸国のジャガイモの単位面積（ヘクタール）あたりの収量は約30トンに達するのに対して、アンデスの農村ではその10分の1の3トンほどでしかない。しかも、先述したようにアンデスでは少なくとも数年間は休閑しているため、耕地面積あたりでの収量は先進諸国の数十分の1ときわめて低いのである。

これほどまでにアンデス高地の農村における収量の低い理由のひとつは、アンデス農民が収量の高い品種ではなく、収量の低い在来品種を栽培していることに求められる。また、肥料はアンデスで古くから使われてきた家畜の糞であり、これも化学肥料と比べれば効果は小さい。これらの事実を農民も知らないわけではないが、改良品種や化学肥料を購入することは自給的な農業をおこなう彼らにとっては難しい。自給農業では、現金を得る手段がほとんどないからである。

こうして、アンデス高地の農業は、安定性を求めれば収量が低くなり、高い生産性を求めれば収穫に対する危険性が増すというジレンマをかかえている。しかし、このジレンマを解決することは容易ではなさそうである。おそらく、容易でないからこそ、インカ帝国が滅亡してから約500年もの年月を経ながら中央アンデス高地では今もなおインカ以来の伝統的な色彩の濃い農業をつづけている農民が多いと考えられるのである。

## 10 まとめ

これまで述べてきた中央アンデス高地における根栽農耕文化の特色は、いずれも遅くともインカ時代には知られていたものばかりである。ジャガイモの倍数体の利用に関しては、クロニスタがパパと呼ばれるジャガイモとともに苦みのあるルキ・ジャガイモについても言及していたことから、インカ時代にも3倍体や5倍体のジャガイモがあったことがわかる。また、スペイン人たちはチューニョやモラヤなどについても述べているので、イモ類の加工技術が発達していたことも明らかである。さらに、休閒システムや家畜の糞による施肥の慣行、踏み鋤の利用も、クロニスタの記録からインカ時代には知られていた。したがって、中央アンデス高地の根栽農耕文化の特色は遅くともインカ時代にまでさかのぼれる。

それでは、根栽農耕文化とインカ帝国のあいだにはどのような関係があったのだろうか。まとめにかえて、最後にこの問題を検討しておこう。中央アンデスの社会や文化を考えようとするとき、インカ帝国の存在を無視しては語れないからである。

まず、あらためて中央アンデスにおける根栽農耕文化の地理的な範囲を確認しておこう。根栽農耕文化の特色としてあげたジャガイモの倍数体利用、イモ類の加工技術や休閒システム、さらに踏み鋤の利用など、いずれの分布を見ても、それは中央アンデスの中南部高地に集中している。このことから中央アンデスで典型的な根栽農耕文化が見られるのは、その中南部高地であると考えてよいだろう。

この中央アンデス中南部高地という地理的な範囲で思いおこされることがある。それは、そこそがインカ帝国のもともとの勢力範囲であったことである。たしかに、インカ帝国は最終的にはアンデスの大部分の地域を支配下においたが、第9代のパチャクティ時代までの勢力範囲は中央アンデスの中南部高地にかぎられていたのである。このことは、インカ帝国の本来の生業が根栽農耕に基礎をおいていたことを物語るものではないかと考えられる。

パチャクティ時代までのインカ帝国の生業が根栽農耕に基礎をおいたものであったことを示唆するものが他にもある。それは、パチャクティとともにインカ帝国のすべての制度が始まり、強制移住政策もそのひとつであったことである。そして、この強制移住政策の目的のひとつは未開拓の土地を増やすことであり、その耕地はジャガイモなどのイモ類のためのものではなく、「トウモロコシのなる畑」であった。このことは、少なくとも中央アンデスの中南部高地では、イモ類栽培のために新たな土地を拓く必要がないほどに根栽農耕が発達していたことを物語るものではないか。

一方で、中央アンデスの山岳地帯におけるトウモロコシ栽培は長いあいだ細々としたものであったと考えられる。だからこそ、パチャクティはアンデスの住民を強制移住させてまでトウモロコシ栽培の拡大に努めたに違いない。実際に、アンデスの山岳地帯に

おけるトウモロコシの大規模な栽培はインカ帝国の版図の拡大とともに広がったと考えられている [Murra 1975: 57]。また、インカ時代の後期になって階段耕地の規模が大きくなり、切石を使った石積み技術も精巧になる。これは、高度に中央集権化された政治組織の成立によって大量の労働力を駆使し、大規模な土木事業が可能になったことを物語っている [Rowe 1946: 210-211]。

さて、インカ帝国の本来の生業が根栽農耕に基礎をおいていたと上述したが、これは序章で紹介した江上や伊東の説に真っ向から異を唱えるものとなる。2人とも「穀物農耕こそが文明発達の必要条件である」と主張しているからだ。

民族植物学者の中尾もイモ類の欠点について次のように述べている。

「一般にイモ類の貯蔵性は低く、輸送となるとさらに困難である。ばあいによるとこの貯蔵困難は、豊かな食糧生産量にもかかわらず、時期的に食糧欠乏をおこし、人口収容力を制限することになる。(中略) そのため、この農耕のもとでは大地域にわたる権力の集中が容易に成立しがたくなり、個人の蓄積も、最も実用的な貨財である食糧をもってしてははなはだ困難である」。[中尾 1967: 347]

これは東南アジアの熱帯雨林地帯の根栽農耕について述べたものであるが、これについて伊東はより具体的に次のように述べている。

「農業革命を先駆的に遂行した東南アジアが、都市革命の段階で脱落したのは、おそらくヤムイモ・タロイモなどを基本農作物とする根栽農耕であったからであろう。なぜかといえば、これらのイモ類は麦などの穀物に比して保存性、蓄積性に欠けており、そのことが生産力の増大、ひいては「社会的余剰」の発生をさまたげる要因として大きく影響を与えたと考えられるからである」。[伊東 1988: 108-109]

ここで注意すべきことがある。それは、中尾も伊東も、もっぱら熱帯低地の東南アジアを念頭において根栽農耕を論じていることだ。すなわち、中央アンデスのような寒冷高地で生まれた根栽農耕は彼らの視野には入っていないのである。

ここで注意しなければならないことが、もうひとつある。それは、中央アンデスではトウモロコシ栽培の拡大が根栽農耕にとってかわったのではなく、古くからおこなわれていたイモ類栽培に新たにトウモロコシ栽培も加わったことである。じつは、このような生業形態こそはアンデス高地の経済の基本であった。ムラが明らかにしたように、アンデス高地の経済の基本は高度により異なる自然資源を最大限に利用することであり、そのために各民族あるいは各集落は様々な自然区分帯に人を送って資源の入手に努めていたのである。こうして、アンデス高地の住民はプナヤスニなどの高地だけを利用するのではなく、その下にあるキチュアやユンガなどの低地部にある環境も利用することになったのであろう。

このような環境利用の方法は中期ホライズン（ワリ）あるいは地方発展期（ティワタク）の時代にまでさかのぼれる可能性があるが、それが本格化したのはミティマエスの制度などに見られるようにインカ時代であった。そして、このような大きな高度差利用こそがインカ帝国の急速な拡大を可能にした大きな要因であると考えられる。インカ帝国は主食となるジャガイモなどのイモ類にくわえて、トウモロコシやココなど儀礼的・宗教的価値の高い作物も容易に手に入れることができるようになったからである。

ここで儀礼的・宗教的価値の高い作物がインカ帝国の征服に果たした特異な役割について述べておかなければならない。じつはインカ帝国の征服は必ずしも軍事的行動をともなったわけではなく、しばしば被征服者に贈り物を与えることによって好意を得、自分たちの味方にした。つまり、インカ帝国の征服にとって重要なのは領土支配ではなく、人的資源の確保にあった。ピースたちによれば、「インカの征服とは、血なまぐさい軍事征服よりも、アンデス世界で古くからおこなわれていた互惠と再分配のシステムの拡大として実現された」のであった〔ピース・増田 1988: 63〕。したがって、征服のときの「贈り物」はインカの再分配行為であり、その恩恵とひきかえにインカ帝国は相手から一定期間の労力提供を求めることができたのである。そして、この征服のときの「贈り物」にトウモロコシやココなどが使われたと考えられるのである。

著名な歴史民族学者であるロストウォロフスキによれば、この「贈り物」は女性、衣料、奢侈品、とくにココなどであり、これらを「気前よく」相手に与えなければならなかったとされる〔ロストウォロフスキ 2003: 51〕。このことは、インカ王が「贈り物」となる大量の物資を準備しなければならなかったことを物語るが、この点でトウモロコシも贈り物の中心的な役割を果たしたのではなかったか。

そのことを物語るものがいくつもある。たとえば、インカ時代の後期になって大規模な階段耕地が建設されたことも、大量のトウモロコシが贈り物として必要になったからであろう。また、インカの倉庫に貯蔵された食糧のなかでトウモロコシが目立っていたのも、それが贈り物として有効だったからではなかったか。さらに、トウモロコシから造ったチチャ酒をインカ王が「気前よく」大量に住民たちにあたえなければならなかったこともチチャ酒の贈り物としての重要性を物語るものであろう。

こうして見てくると、トウモロコシはインカ帝国の成立ではなく、その拡大にきわめて大きな役割を果たしたらしいことがうかがえる。インカ王は権威によって集めた富を気前よく再分配することによって多くの民族を味方につけることができたが、この再分配の中心になっていたものこそがトウモロコシであったと考えられるからである。それゆえにトウモロコシはインカ帝国の農業のなかで注目されるのであろう。

このトウモロコシの重要性について、私も否定するつもりはまったくない。むしろ、インカ帝国におけるトウモロコシの特異かつ重要な役割を指摘することが本稿の目的のひとつであった。たしかに、クロニカにも散見されるように一般庶民のなかにもトウモ

ロコシを主食にする人がいたらしい。しかし、中央アンデスの山岳地帯、とくに高地における食糧源としての作物をまずあげるとすれば、それはジャガイモを中心とするイモ類であったと考えられる。前章で指摘した根栽農耕文化圏の存在がそれを雄弁に物語るのではないか。この食糧源としてのイモ類の重要性を指摘することこそが、本稿のもうひとつの目的なのであった。

最後に、今後の展望について1点だけ言及しておきたいことがある。それは、地域間比較研究の重要性である。本稿は、中央アンデスの高地部に焦点をあてて論を進めてきたが、その視野には中央アンデスの低地部や、北部アンデス、そして南部アンデスも入れてきた。これらの地域と比較することによって、中央アンデス高地の特徴がより明らかになると判断したからである。それというのも、従来の文化人類学的なアンデス研究では、大半の研究者が中央アンデスだけ、それもほとんどがペルー・アンデスだけに關心をもち、他地域との比較の視点が乏しく、それがアンデスのなかでの中央アンデスの特徴の把握を困難にしていたと判断されたからである。

この地域間比較研究は、アンデスに地域を限定する必要はない。むしろ、地球レベルでアンデスと類似した山岳地域との比較研究が重要である。実際に、1970年代から1980年代にかけてアンデスとヒマラヤの環境利用の比較研究やアンデス・ヒマラヤ・アルプスとの比較研究などが欧米人の人類学者によって何度も実施された [Rhoades and Thompson 1975; Brush 1976a; Guillet 1983]。しかし、広域におよぶ地域間比較研究は容易ではなく、本格的なフィールドワークに基づいた調査研究はほとんどなかった。そのためか、この種の研究は最近ほとんど姿を消した。

このような状況のなかで、私は10名の研究仲間とともに1994年から3年間にわたり、ネパール東部クンプ地方で文化人類学、社会人類学、社会学、地理学、植物生態学、農学などの総合的な調査を実施したが、これも中央アンデスとの比較を視野に入れたものであった [山本・稲村 2000]。両地域ともに、熱帯ないしは亜熱帯に位置する山岳地帯であるからだ。

この調査をもとに、あらためて組織した調査計画が2001年から4年間にわたって実施した「アンデス高地における環境利用の特質に関する文化人類学的研究—ヒマラヤ・チベットとの比較」(研究代表者 山本紀夫)であった。この調査は、副題でも謳っているようにアンデスとヒマラヤ・チベットとの環境利用に関する地域間比較研究を狙ったものであった [山本 2007]。

このような経験を積み重ねることによって、視野はさらに広がり、アンデス、ヒマラヤ、チベットだけでなく、中米の高地や東アフリカ(とくにエチオピア)も地域間比較研究の対象とするようになった [山本 2006; 2008b]。巨視的に見れば、中央アンデスも、ネパールからチベットにかけての一部地域も、中米高地も、そしてエチオピア高地も熱帯ないしは亜熱帯に位置する山岳地帯だからである。

もちろん、これらの地域には環境の類似性とともな様々な差異も存在する。これらの類似性や差異を生み出す要因について明らかにしようとする調査計画こそが、現在科学研究費によって遂行中の「熱帯高地における環境開発の地域間比較研究—『高地文明』の発見に向けて」（研究代表者 山本紀夫、2011～2015）である。この調査の目的が達成されたときには、熱帯および亜熱帯における環境利用の特色が明らかになり、ひいては中央アンデス高地の農耕文化の特色の解明にも新たな地平を切り開くものと確信している。